ビブリオエッセー

産経新聞　令和２年（2020年）３月21日（土）

大阪府東大阪市　中野日奈乃　（20）

こんな私をわかってほしい

【生きてるだけで、愛。】　本谷有希子（新潮文庫）

辛い心の病を抱えている人などに「メンヘラ」という言葉が平然と飛びかっている。いまや流行している。私は『生きてるだけで、愛。』を読み終え、この言葉を安易に口に出すことが怖くなった。

私たちの間でのメンヘラは可愛さやあざとさを感じる言葉であり、かまってほしい人がSNSでアピールしていたり、ファッション的なものが多いと思っていた。しかし、この小説は本物のメンヘラが存在していることを教えてくれる。主人公の「あたし」、寧子（やすこ）は本物だ。

突拍子もない言動、過眠症、引きこもり…、自分なりに必死で生きているのに駄目の烙印を押されて鬱になる日々。バイトは辞めるために始めるんじゃない、寝てたくて寝てるんじゃない、怒りたくて怒ってるんじゃない。

いまは合コンで知り合った彼氏、津奈木のマンションに転がり込み、そのまま同棲しているが、そこへ元カノが戻ってきて、話はややこしくなる。寧子がもし身近にいたらメンヘラだとか社会不適合者といわれるのかもしれないが、そんな言葉で片づけるべきではないと思う。

ただ人より少し変わってはいるが、一人の悩める女性なのだから。少し感情移入してしまったかもしれないが、激情というありのままの感情や病と戦う彼女を美しいと感じた。見た目などでは計り知れない美しさなのだ。

繰り返し、思う。メンヘラという言葉でくくってしまっていいのだろうか。映画化もされたこの小説。寧子の物語をぜひ読んでみてほしい。

2020.3.21

※無断転載不可